

---

# 河童戦記～時姫の章～

万墨人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

河童戦記／時姫の章

### 【NZコード】

N4247M

### 【作者名】

万墨人

### 【あらすじ】

『河童戦記』第一部。京の鴨川にある、信太屋敷を取り囲む軍勢！屋敷の主人、時姫は、信太家唯一人の跡取りで、陰陽師の血を継いでいた。時姫の家来、源二は、この危機に時姫を護つて、京を脱出するのだったが……。

かすかな物音に、源一は田を見開いた。がばりと寝床から跳ね上がるよう起き上がると、全身を耳にして闇に気配を探る。

取り囲まれている。

起き上がったときには、枕元の太刀を掴んでいる。そろりと足音を忍ばせ、下男小屋の蔀戸しともを押し上げた。

松明の火明かりが源一の顔をあかあかと照らし出した。屋敷の正門あたりに、無数の明かりが揺れている。

真つ黒な鞣なめし皮のような顔。半白の髪は源一の年令を表していたが、がつしりと田のよつた逞しい顎と、着物から覗く肌は、脂びかりするくらいに若々しい。源一はぎょろつと田を見開き、歯をむき出して唸つた。

「……いや、もうけよつと多いか。この屋敷を取り囲むには、仰々しいほどの人数である。

ゆつくりと後じさりすると、源一は手早く支度を始めた。太刀を帯にねじこみ、革の半袴を身につける。ちよつと考え、鎖帷子を身につける。すべてが終わると、土間に下りて草鞋の紐をぎゅっと締め上げた。

かねて用意の笈かばを背負うと、音がしないよう注意して引き戸を開け、外へ出た。背中に担いだ笈にはまさかの時のために食料、金子などが詰められている。

見上げると、下男小屋の屋根越しに田が出ていた。月夜の夜襲と

は、敵は戦といつものを知らぬ……。いや、そんなことも気にせぬほど焦つてゐるのか。

足早に中庭を突つ切り、母屋へ向かつた。

屋敷内はこの夜襲を知らぬよつに静まりかえつてゐる。もつとも、屋敷に住まつるのは源一と、主人である時姫、それと使用人夫婦くらいのものだ。

夫婦は源一と同じよつて屋敷内の下男部屋に住んでゐる。おそらく、この異変にも気付かず、高鼾をかけて眠り込んでゐるに違ひない。

源一は母屋の濡れ縁に膝まづくと、やつと声を掛けた。

「姫さま……時姫さま……。お田覓めでござこまじょうか?」

源一か……と女の声がして、からつと戸口が開かれた。はつ、と源一は頭を下げる。

「夜襲でござります。すでに屋敷は東西南北、すべて敵の手により取り囲まれております。すぐに脱出せねば、姫さまが虜になるのは必定」

そこまで言上じて源一は顔を上げた。

あつ、と思わず声を上げてしまつ。そこで、源一の主人である時姫が立つてゐた。

月明かりに浮かぶ卵形の顔。冷え冷えとするほど白い肌。切れ長の大きな瞳が、静かに源一を見つめている。

小むめの唇と、細い顎のせいで年よりはかなり幼く見える顔立ちだが、その瞳は全体の印象を裏切っている。何ものも見透かすような瞳は、どこか年令を超越した叡智を宿すようで、源一は時姫の瞳に見つめられるたびなぜか落ち着きを失う自分を感じていた。

しかし、今の時姫は、源一がいつも見慣れた姿ではなかつた。

粗末な小袖を身に着け、長い髪の毛は背中でぎゅっと絞つて垂らしている。普段は内掛けを纏つてているのに、まるで京の町を歩く身分の低い婢女のようであった。

時姫は源一の驚く顔を見て楽しむように笑顔を見せた。ちょっと小袖を引っ張ると、小首をかしげる。

「どう? 似合いますか?」

「そ、そのお姿は」

「かねて、このようなことがあると予感しておりましたので、この前、求めておきました。いつもの姿では、逃げ出すこともできませんでしょ? それに、この着物、とても動きやすくて姿は好きですよ」

源一は「敵わぬ」と首を振った。姫さまはなんでも承知いたしておるわい……。

懐から女物の草鞋を取り出すと、時姫の足もとに膝まづいた。

「これをお召しなつてください」

「ありがとうございます」と礼を言つて時姫は足を差し出した。源一は手早く

時姫の足に草鞋を履かせると立ち上がる。

「それでは、出かけましょう。抜け口は用意しておりますので」

はい、と時姫は素直につなぎいた。

ここは京の都の鴨川ぞいにある信太<sup>しのだ</sup>従三位屋敷である。信太家は、古い陰陽師の家柄で、時姫はそのただ一人の後とりだ。

かつては御所に足しげく通うこともあつたが、時姫の父親が亡くなつてからは参内もなくなり、現在は閑散としている。

ところが近ごろ、たつた一人の時姫に御所から執拗な参内の命令が出るようになつた。

命令を出しているのは【御門】<sup>みかど</sup>であった。その命令に姫は、今まで曖昧な返事を繰り返すだけで、じつと屋敷内に留まつている。【御門】の狙いは信太家に伝わる?鍵?である。しかし時姫は、父親から「決して【御門】に?鍵?を渡してはならぬ」と遺言されたいた。そのため、時姫は【御門】の命令を拒否していたのだ。

【御門】。それは謎の存在だ。御所にいることは確かだが、誰もその姿を見た者はいない。しかし【御門】の命令は絶対的で、時姫一人だけが逆らつている。

源一は、もともと北面の武士であつた。それも、奇門遁甲を能ぐする特殊な一団に属していた。

信太従三位が御所に参内していた当時、従三位の目に止まり、懇望されて屋敷に入り込んだ。

そのころ従三位は、このような事態があることを予感していたのかもしだれぬ。しかし請われて屋敷に住まつようになり、そのうち時姫を知るようになつて、こんどは源一のほうが時姫を守ることが自分の使命であると思い始めていた。

優しい、とか正直だとかとは少し違う、時姫独特の透明感があつ

た。それは時として人に奇異の念を思わせるものがあつたが、源一の心に突き刺さるものがあつた。

「 いじゆうじやこます」

源一が案内したのは、屋敷の裏手にある、南天の茂みに埋まるようになつて、隠れている井戸であった。

ただし、空井戸である。川の流れが変わったのか、ある日、唐突に水が涸れ、現在では蓋をしたまま忘れ果てられた状態になつてゐる。

源一は井戸の蓋を持ちあげた。深々とした井戸に、縄梯子が垂らされている。

「これを降りていただきます。」の日のあるのを予想し、抜け道を作つておきました」

源一の言葉に、時姫は「わごわと井戸を覗き込んだ。月のひかりが中天に懸かって、井戸の底まで届いている。

## 抜け道

「源一、そちも一緒に降りてくれるのあります?」

心細そうな時姫の声に、源一の胸はちくつと痛んだ。それでも、ゆっくりと首を振った。

「いいえ。それがしは、姫さまをお落とし申し上げるため、屋敷に留まるつもりです。一騒ぎいたして、敵の田を引きつけましょうぞ!」

源一の言葉に、はっと時姫は唾を飲み込んだが、それでも強くうなずいた。

「わかりました! 妻は一人で参ります。そなたは敵の田を引きつけたら、逃げ出すのでしょうか? まさか、切り結ぶなど、考えておりませんな?」

念を押す時姫に、源一は自分の身を案じる主人の心根を感じ、胸が熱くなるのを感じていた。

「あたりまえでござります。それがしの使命は姫さまを無事、お落とし申し上げることしかござりませぬ。抜け道を出たら、そこでお待ちくだされ。それがし、かならずや姫さまのもとへ参上しますゆえ」

はい、と点頭して時姫はそろりと足を持ち上げ、井戸をまたいだ。指を縄梯子に絡め、慎重に降りていく。それを確認して、源一は蓋を持ち上げた。

「姫さま! 蓋を元通りにいたしますぞ! 暗くなりますが、底に達すれば、抜け穴があります。どうかお気をつけて……」

「ん、と姫の声が聞こえてくる。『ううわけか、時姫の声は童女のよにあどけなく響いた。

「ひとつ蓋を元通りに戻すと、源一は井戸を隠すため、周りの茂みを蓋の上に重ねた。これで屋間の光で見なければ、そこに空井戸が存在することは判らないだろ。」

さつと井戸に背を向けると、源一は正門の方角を見やつた。

開門　　と、喚き声が聞こえてくる。いよいよ敵勢は、戦を仕掛けつもりだ！

「んんんんん、と正門の扉を叩く音がある。」

「面倒だ。叩き壊せ！」と命令する声がした。

ビーン、ビーンと、なにか重いものを扉に突き立てる音がある。

源一は走りだした。

蓋が閉まつて、あたりは真つ暗になつた。

手さぐりで繩梯子を降りていく時姫は、ただ機械的に手足を動かすことだけに専念する。

やがて、足先が底に着いた。ほつと溜息をつき、時姫は手をのばして、そつと井戸の内側を探る。

源一の言つていた抜け穴がある。

時姫が腰を屈め、四つん這いになつてやつと通れるほどの高さである。頭を低くし、手を地面について、姫は這い進んだ。

空井戸とはいえ、湿氣があるのか、妙な匂いが籠もつている。地面はじつとじつと濡つっていた。

やがて行く手がぼんやりと明るくなつた。抜け穴の出口だ。

ぽかりと時姫の頭が穴の出口から突き出される。穴は斜面に開いていた。まわりは、一面の茂みである。背の高いスキの穂先がかすかな空氣の動きにそよいでいるのが、月明かりに見てとれる。

「ひで待つよに」と源一は命じていた。

その言葉を守り、時姫は膝を折り、その場に座り込んだ。静かな月夜に、かすかに虫の音が聞こえている。

「は、どの辺かしら？」

時姫はぽんやりと周りを見わたした。

茂みの向こうに一筋、川面が見えている。どうやら鴨川の川原の  
ようだ。

その川越しに、月夜に照らされ、御所の建物が遠く見えている。  
巨大な【大極殿】の大屋根があたりを圧するようにそびえ、その背  
後に一つの塔が天を突き刺すように高々と立っている。

?  
声?

塔の表面は銀色の金属で、それはどんな雨にも風にも風化しない不思議な素材で造られていた。紡錘形の塔の先端は鋭く尖り、下に行くと魚の鱗のような羽根が四枚、塔を地面上に支えている。塔は【おふね御舟】と呼ばれている。

信太一族には言い伝えがあつた。【御舟】は昔、空を飛ぶ船であったという。船にしては、奇妙な形をしている。

【御舟】から降り立つた人々が、ここ京の都を作り、徐々に広がつていつたと、言い伝えられているが、詳しいことは判らなくなっている。

時姫はまだ母が生きていた幼いころを思い出していた。母は病弱であったが、時折気分のいいときは、さまざまな昔語りをしてくれた。その中に、【御舟】の昔語りも混じっていた。

御所から目を逸らし、時姫は氣息を整えた。背筋をのばし、時姫は目を閉じる。

そのまま、じっと待つ。

ほどなく?声?が聞こえてくる。

ただし、常の人の耳に出来る?声?ではない。時姫のみが聞くことができる?声?なのだ。

これが信太一族に伝わる【聞こえ】のちからである。この能力あるため、時姫は源一が報告をする前に敵の軍勢に気付くことができたのである。

世には？声？が満ちている。それは姫のほかには誰にも耳にする  
ことの出来ない、ひそやかな囁きであった。だが、時姫が耳を澄ま  
せると、聞くことができるのである。

川のせせらぎ、風のそよぎ。すべてに？声？がある。その？声？  
に時姫は耳を傾けた。

？声？の中でもっとも強いのは、御所の【御舟】から発せられるも  
のであった。【御舟】は一日中？声？を周囲に向け発している。

その中から、時姫は信太屋敷から聞こえてくる？声？を聞き分け  
た。屋敷を取りまく軍勢の敵意に満ちた？声？。

時姫は眉をひそめた。

聞き慣れない？声？が聞こえる。

これは、なんだろ？ひどく単調で、感情がまったく感じられ  
ない異質な？声？。

時姫は目を見開いた。  
これは傀儡だ！

ぱりぱり、べきべきと音を立て、屋敷の木の扉が外からの攻撃に耐え切れず押し開かれる。源一は立ち止まり、物陰に隠れながら、じつと観察を続けた。

篝火に照らされ、ずんぐりとした人のような形のものが立っている。人よりは数倍も巨大である。

じつしりとした両足に、膝元まで達する長い両腕。身体は真四角で、幅広い。頭があるべきところには窪みがあり、馬の鞍のような座席がしつらえてあった。その窪みに、人が座っていた。

きやつら傀儡を持ち出したのか！

扉を強引に押し開いたのは、傀儡のちからである。座っているのは傀儡師だ。傀儡師とは、傀儡を思いのままに動かす技能を代々伝えた一族であった。

つるりとした兜のようなものを被り、兜には眼鏡のようなものが付属している。傀儡師が顔を動かすと、眼鏡の雲母のような透明な板が火明かりを受け、煌めいた。

眼鏡は噂によると、夜の闇を昼間のように映し出すものらしい。

傀儡師の両腕が、傀儡の座席に突き出た何本かの棒をいそがしく前後左右に動かしていた。そのたびに傀儡は、ぎきつ、ぎきつと関節から音を立てて思いのままに動いていく。

傀儡が扉を押しひろげると、さつと数人の徒步の者が屋敷内に飛び込んだ。暗闇を照らし出すためか、手早く篝火をそこかしこに設

置し始める。

次に、槍を持った兵士たちが、鎧の音をがちゃがちゃ騒がしく立てながら侵入した。

## 衣装

源一は戦いの予感にわれ知らず微笑が浮かぶのを押さえ切れなかつた。確かに姫を無事逃すため自分は囮になるつもりである。ただし、どう囮になるかは敵の出方次第といつものだ！

背中に担いだ<sup>おい</sup>笈の底の蓋を、源一は手さぐりで開いた。手に数枚の十字手裏剣が触れる。

源一の手首が素早く動き、十字手裏剣を次々と投げる。

ぎやあっ、という悲鳴が兵士たちの間から上がった。みな首の鎧で覆われていない部分を押さえ、ばたばたと倒れていく。

さつと緊張が兵士たちに走る。源一は故意に足音を立て、その前を突っ切った。

あつ、と兵士たちは源一の姿を見て声を発した。

「時姫だ！」  
「逃げるぞ！」

源一は時姫の衣服を持ち出して、それを頭から被っていたのだ。遠めには姫の姿に見えるであつと期待したのだが、ものの見事に、囮に当たってくれたようだ。

篝火の明かりが届かない暗闇に、ひらひらと姫の衣装が見え隠れしている。兵士たちは釣られたように走り出した。

田の前に堀が迫る。とん、と源一は跳躍した。

たつた一跳躍で源一は堀の上にひらりと飛び乗ると、素早く周囲を見渡した。

屋敷の周りにいた数人の兵士たちが堀の上の源一を見上げ指さし「時姫」だと声を上げている。

さつと地面に降り立つと、源一は姫の衣服を頭から被つたまま、走り出した。

ともかく鴨川から離れる方向を手指す。本当の姫は、そこにあらわれるのだから。

どたばたと、みつともない足音を立てて兵士たちは追いかける。源一の足取りはひらり、ひらりと飛ぶようで、まったく足音を立てない。

「おおおん……。

暗闇を、ぱつと白い光が切り裂いた。ぱつ、と源一は立ち止まつた。

「一輪車だ！」

数騎の一輪車が道を塞ぐよつと並んでいる。跨っているのは母衣武者たちだ。鎧の背中に旗、指物を立て、一輪車の棍棒を握りしめている。

母衣武者たちもまた、傀儡師とおなじような眼鏡を兜の置底の下につけていた。

一輪車の前部にある照明装置が威嚇するよつに闇を照りだしていた。武者たちが棍棒をぐこつ、と回転をやると、一輪車は震え、咆哮する。

「一輪車、傀儡……両方とも機械の生き物でもある。

けたたましい音を立て、一輪車が向かってくる。跨る武者たちは手にした槍を水平に構え、源一を目がけて突進してきた。

源一は姫の衣装を脱ぎ捨てた。もはや目眩ましをする段階は過ぎた。やつと向きを変えると、屋敷の方向へ戻る。

屋敷の正門から、ずしり、ずしり……と足音を立てて傀儡が姿を現した。

源一は蹈鞴たたらを踏んで立ち止まる。背後からは一輪車に乗った武者たちが迫ってきた。

傀儡に乗り込んだ傀儡師は、源一の姿を見て、勝ち誇った笑みを浮かべた。顔の半分を覆った眼鏡が不気味に光る。がばっと傀儡は両手をひろげ、通せんぼの格好になる。

源一は懷に手を入れると、玉を取り出し、地面に叩きつけた。

ぱあーんっ、と炸裂音がして、眩しい光が一瞬びかつと電光のごとく白く輝いた。源一が叩きつけたのは、目眩ましのための火薬玉だ。

わあっ、と傀儡師が悲鳴を上げ、顔から慌てて眼鏡を巻り取つた。一瞬の光芒であつたが、強烈な光輝が傀儡師が掛けている眼鏡を通じて増幅させたのだ。

今、傀儡師には何も見えない状態になつていて、背後でも同じような悲鳴が上がっている。がちゃ、がちゃんと音を立てて一輪車が倒れこみ、母衣武者たちが目を手で覆つて、うずくまつっていた。

傀儡はぎくしゃくとあつちによろけ、こつちに倒れこむような奇妙な動きを繰り返していた。傀儡師が操ることができなくなつて、立ち往生しているのだ。

源一はその脇を駆け抜けた。

闇に紛れ、一散に走る。

時姫が待つていてる。

時姫は立ち上がった。

がさがさとススキの穂を搔きわけ、誰かが近づいてくる。いくら月夜とはいえ、人の顔を見分けるほど明るさではない。

時姫は、そつと着物の帯から懐剣を取り出し、握りしめた。敵であれば、せめて一太刀！　いや、それが無理なら、自害するつもりだった。

姫さま一つ　！

野太い声に、時姫は安堵の吐息を漏らした。その声は間違いなく、源二のものだった。

姿を現した源二に、時姫はぎくりと立ち止まつた。

髪の毛は大童おおわらわに乱れ、着物のあちこちは切り裂かれ、返り血を受けている。手には抜き身の刀を下げていた。

「少々、手荒い仕儀に遭いましたが、なんとか敵勢を散らしてまいりました。さ、急ぎましょ！」

懐紙を使って刀身を拭うと、源二はぱちりと刀を鞘に納めた。

時姫は、うなずいた。

「案内あないを頼みます。妾は、外の事情は、まるで不案内ですか？」  
「お任せくだされ！　まずは京から離れることでござります」

主従はその場を立ち去つた。

## 熱風

熱風が真正面から吹きつけ、埃を舞い上げる。空気は乾ききっていた。

街道のまわりの畠の地面は鱗割れ、あちこちにしぶとい生命力を持つ雑草が顔を出していたが、それらもすべて黄色く枯れ果て、より一層の荒廃を強調しているかのようだ。

ぎー、がちゃん……  
ぎー、がちゃん……

軋み音を立て、一台の耕運機<sup>うんし</sup>が乾ききった大地をゆっくりと動いていく。その後ろを、疲れ切った顔をした農夫が棍棒を持つて歩いている。畠を耕しているのだ。

地面は無残に鱗割れ、耕作行為そのものが無為としか思えない。それでも執念に突き動かされてでもいるのか、農夫は無心に畠の土を掘り返していた。

そのうち耕運機は咳き込むような音を立て、動かなくなつた。農夫は諦め切った様子で、呆然と立ち尽くしている。

田照りであった。

「これは、酷い……」

蓑笠を押し上げ、源一はつぶやいた。

背後を歩いていた時姫は、源一が立ち止まつたのに気付く、足を止める。源一と肩を並べ、周囲の様子に目を止めた。

時姫もまた、日差しを避けるための笠を被つてゐる。手には源一が枝から折り取つた杖を持つていた。

「噂では聞いていましたが、これほどの失望つても見ませんでした……」

衝撃を受けている様子で、田につつすらと涙が浮かんでゐる。源一は首を振ると、再び歩き出す。時姫はその背中に声を掛けた。「源一……なぜこのような有様になつたのであらうか？ もしかし天の怒りか？」

「そうでもないませぬ」と源一は、憂鬱なを匂せずに答えた

「あれをじ聾じあれ」

肘を上げ、遠くの山脈を指差した。

遠霞に、威<sup>い</sup>狹<sup>き</sup>の山々が連なりを見せてゐる。

「あの山々の向いには海になります。冬になると海からの風は山の上で雪雲を作り、山の頂上に雪を降らせます。その雪は春になれば溶け、山中を伝い、やがてこの辺りの畠を潤す川の水となりもつす。しかし、この冬はあまり雪が積もりませぬ。従つて、ここいらを潤す川の水も足りず、夏になつて火照りと成り果てもうした……」

言葉を切り、ぐつと拳を固める。次に口を開いたときは、口調に怒りが籠められていた。

「田照りになることは、判りきつておつたのでござるな……御所の役人どもは、すでに春先から報告を受けておつたはずじゃ。なのに、のうのうと知らんぷりを決め込んでおつたのぢや！ 少しでも民を哀れと思し召しなら、なんとかできたはずじゃのこ……」

時姫は源一の口調に唇を微かに震わせた。田が驚きのあまり、一杯に見開かれている。

それを背中で感じとっていた源一は、つい憤然となつた自分に後悔していた。

時姫の前では、いや、どんな相手でも、源一は怒りの表情を剥き出しにすることはない。いつも、陽気で快活な自分を演出していたのである。

が、あの呆然と立ち尽くしていた農夫の姿に、つい幼いころ田にした父親の姿が姿が重なり、怒りの感情を抑え切れなかつた。

実を言つと、源一はこの近在の百姓の息子であつた。まだ幼児のころ、これと同じような口照りが見舞い、飢えが村を襲つたのであ

る。水争いが起き、その争いで父親、兄、親類一同が次々と殺され、源一は孤児となつた。

孤児となつた源一を取り取ってくれたのが、京の御所で雑掌となつていた、義理の父親である。父親代わりの侍は源一に奇門遁甲の術を授けてくれ、さらには北面の武士に推薦すら、してくれたのである。

これでは、沢山の人間が死ぬなあ……。

そういう場面をこの目で見て知つてゐるだけに、源一は何も言えず黙々と歩いていた。同情すら思い上がりである、と考える。だから、何も言えぬ。

「源一、あれは何でしょ？」

不意に時姫が、何かを見つけたように声を高めた。立ち止まり、源一は姫の視線を追う。

かつては水の流れた川床であつたろうか、うねうねと蛇行した塗みが見える。その真ん中に、何かが　いや何者かが仰向けに倒れていた。

言葉を発した次の瞬間、すでに時姫は、そちらへ足を向けていた。

おやめなされ　　という言葉を源一は呑みこんだ。こういう場面に時姫に「待て、暫し」と制止することは無駄であると知り抜いている。

時姫は意外と身軽に川床の斜面を降りていく。後を追う源一は、何かあつては一大事と、足を急がせた。

倒れていたのは人……のよう見える何かであった。

細い手足、顔のようないいがついているから、辛うじて人のよう見える。が、その顔は、断じて人間ではない。

嘴のようなくぼみた口。閉じた両目は大きく、顔の半分ほどを占めている。頭の天辺がやや塗み、その周りをペたりとした黒髪が取り巻いていた。

「人……でしょうか？」

尋ねる時姫に、源一は首を振った。

「人ではござらぬ。河童でござらぬ」

「河童？」

「左様、妖怪変化、魑魅魍魎の類でござる。おそらく、この日照りで頭の皿が乾いてしまつたのでござらむ。さて、このようなものに関わると、後生が悪うござる。先を急ぎますぞー」

が、姫は動かない。まじまじと倒れている河童を見つめている。時姫が覗き込んだために日影ができる、河童の顔を日差しから遮る格好になる。

ぴくり、と河童の瞼が痙攣した。はつ、と時姫は口を開いた。

「生きておるみじゅやー、源一、どうすればよい？」

源一は舌打ちをした。

「おやめなされ！ そのような妖怪に情けを掛けるのは、却つて仇となるに決まっておりもうす！ 見捨てるこじや。忘れもうしたのでござるか？ 我らは追われてこじうことを」

時姫は源一を見て、凜然と言葉を押し出した。

「妾には、そのようなことはできません。妖怪であろうが、人間であろうが、生きていることには変わりないはず！ さて、教えてたもれ。この河童を救う手立てを」

しかたない、と源一は河童の頭の皿を指さした。

「それ、その頭の天辺に皿がござりましょー、その皿が乾いたため、動けなくなつたのでござる」

「水を掛ければ生き返るのじやな？」

言つなり、時姫は跪いた。すでに腰の水筒を手にしている。ちやぽん、と水筒の中で水が動いた。

はつ、と河童の口が見開かれた。水の音に反応したのか？

時姫は水筒の栓を抜くと、河童の頭の皿に水を注ぎ入れた。ばかり、と閉じていた河童の口が開かれた。

次の瞬間、河童の手が動いて時姫の水筒を握りしめていた。時姫の手から水筒をもぎ取ると、大きく開けた口に中の水をだぼだぼと

注ぎ入れる。

「へ、へと河童の喉仏が動いた。

飲み干すと、ふーっと溜息をつき、河童は時姫の顔を覗きこんだ。

さ、と時姫は立ち上がった。顔からは血の気が引いていた。その様子を見て取り、やはり止めておけばいいのに、と源一は胸のうちでつぶやいていた。

## 三郎太

見開いた河童の目は、あまりに異様であった。

黒目ばかりで、白目の部分がほとんどない。人間離れした奇妙な瞳が、じっと時姫の顔を見つめている。

時姫と河童の視線が絡みあう。魅入られたように時姫は見つめ返していた。

思わず源一は前に出て、時姫の姿を隠すように立ちはだかった。ゆつくりと河童は身を起こした。探るような視線を今度は源一の顔に当てている。

「礼を申す……」

ぼそりとつぶやく河童に、源一ははっと身構えた。右手は反射的に腰の太刀に伸びている。

「おぬし、喋れるのか」

ふつ、と河童の口が歪み、笑いの形を作った。

「当たり前だ。おれを何だと思っている」

「河童であろう！姫さまがおぬしを憐れと思し召しになつて水をくだされたのじゃ。じゃによって、決して仇をなすではないぞ」

「姫？ その娘、姫と呼ばれる身分なのか！」

指摘に源一は口をつぐんだ。たちまち顔が火照るのを感じていた。

しまつた！ なんといつ失態！

流れのような動作で河童は立ち上がった。立ち上ると、存外と背は高い。源一とほぼ同じくらいはある。

源一の背中越しに、時姫がこわごわ半分、興味半分といった様子で覗き込んでいる。

そんな時姫をちらりと見て、河童は口を開いた。

「お前ら、追われていると言つていたな」

源一はうめき声を上げた。

「おぬし、聞いておつたのか？ 油断のならぬ奴！」

「身体は動かないが、耳はちゃんと聞こえていたよ。礼の替わりに、あんたらに良い隠れ家を教えてやる」

ふつと顔をそらし、山脈を見上げた。つられて源一も視線を動かす。

「あの山懐を見る。ここはこんな日照りに見舞われているが、あそこにはまだ縁がある。この辺りの百姓たちで、気の利いた連中はみな森に逃げ込んでしまっている。無理もない。こんな日照りでは、年貢を払えるわけもないからな。あんたらも、あそこを田指すが良いだろう。そのなりで百姓と称するのは、少し無理があるがな」

じらじらと河童は無遠慮な視線を一人に当てていた。むつとなつて源一は言い返した。

「なぜ百姓であると云つのが無理じゃと申す？」

「着物が新しすぎる。そんな、継ぎの一つもない、立派な着物を身に着けた百姓が、おるわけないだろ？」

河童の田が細くなつた。笑つたのか。源一には河童の表情がよく読めない。

源一は渋面になつたが、言い返せない。河童の言葉は、まさにその通りだつたからだ。

ひょろり、と河童は歩き出したが、何かを思い出したかのようこ  
振り返る。

「おれは、三郎太。河童淵の三郎太だ」

## 対応

ぽつりと投げかけるように言つて、じちらの対応を待つてゐる。

時姫が、口を開いた。

「妾は信太従三位の娘、時子と申します。また、これは従者の源一。以後、お見知りおきを願い申し上げます」

丁寧に頭を下げる

源氏物語

「姫わお、いのよひつな奴輩に名を告げるなど……」

・ 何が名乗ってしののです これが名乗るなしに失礼でし

時姫は澄まして答える。

「それじゃ」と河童の二郎太は片手を挙げた。

「山中に入れば、あの杉林あたり」

描かした。

「こ、今は無住の廃寺があるだろ。荒れてはいるが、雨風は凌げ  
よ。まあ、この田照りだ。当分、雨はなさそうだが  
、ぶつきいらまつて言ひ捨てるなり、いきなり走り出した。

とととと……と、川床の斜面を駆け上り、あつと皿の間に向ひてに姿を消した。

出し抜けのことに、二人は暫し、呆気に取られていた。

「なんとまあ……」

源一は今頃になつて顔に汗が噴き出してくるのを感じていた。懷から手ぬぐいを出して拭うと首を振った。

「やはり物の怪は物の怪。人のようでいて、その心根は違つたようでござるな」

「悪い妖怪では、なされうです」

姫の答に源一は、ぎょっとなつた。

見ると時姫は河童の三郎太が去つた方向を、面白そつた表情になつて見つめている。そんな無邪気な時姫に呆れ、源一はことさらに厳しい表情を作つて声を掛けた。

「姫さま。拙者、さきにも申し上げたよつて、きやつらは妖怪、魑魅魍魎の類でござりますぞ。親しみを覚えて情けを掛けなさると、思わぬ失態をいたしましょ。以後、お気をつけあそばすよつ忠告申し上げます」

時姫は唇を尖らせた。不服そつである。が、それでも源一の忠告に答える。

「判りました。充分、注意いたしましょ」

歩き出した。

源一が立ち止まつているのに気が付き、振り返つた。

「何をしているのです？あの三郎太と申す者が教えてくれた廢寺に急ぎましょ」

## 雪解け水

杉林を田指せ、と河童は言い捨てたが、山懐はかなり距離があった。

目の前に聳えている山塊は、つい田と鼻の先にありそうな錯覚があつたが、実際は歩いても歩いても、いつかな近づく気配はない。

そのうち、荒れ果てた景色が徐々に緑が増えてくる。驛割れた大地が緑豊かな草原に変わり、畑にもちらほらと作物が豊かな実りを見せていた。

夕闇が迫る街道を歩く主従を、その畠で作業している百姓たちがじっと見守っている。

いすれも例外なく視線は険しく、言葉を掛けるのがためらつほどであった。杖を突きながら時姫は源一に尋ねた。

「どうこうじでしよう。みな、妾たちを、まるで親の仇のような目で見ております」

「水のせいではござる」

源一は吐き捨てるように答えた。

「山が近いせいで、この辺りには雪解け水が流れ込んでおります。あの日照りの村からこにく、水を奪うための連中が押しかけるのでござるよ。でござりまするから、あの連中は見慣れぬ余所者を警戒いたしておるのでござるわ」

「妾が水を奪う余所者に見えるのですか？」

「というより、余所者すべてが敵と思っておるのでございましょう。この辺りの者どもは水一滴たりとも、他の土地の人間に分け与えるつもりはないようだござるな」

源一の言葉どおり、少なくなつた水筒に水を補給しようと、これまで向軒かの家に井戸を使わせてもらいたいと交渉したのだが、こじりとく、けんもほろうな応対をされてきたのである。ようやく金を払つて水筒を満たすことができたが、信じられないような金額を請求してきた。

「ともかく、このような土地は、早く通りすがりになる。つまりぬ静いに巻き込まれる可能性がありますからな

源一は足を速めた。

## 強行軍

京を出て、もう十日になる。

二人の衣服は旅を続けるうち旅塵にまみれ、まあまあ、この界隈の百姓の身に着けるもの、と言つても通るくらいにはなつていた。源一の背負つた笈には充分な食料の蓄えがあつたが、それでもこの旅を続けるうち、乏しくなつてきていた。

そろそろ食料も補給しなければ、と源一は思つていたが、その当てが皆無だつた。なにしろ旅籠はたごが存在しないのだ。

他人目につかぬように、との配慮で旅路を選択したのが、裏目に出た。人の往来が多い街道なら気の利いた旅籠くらい幾らでもあるだろうが、源一はそういった街道を避けてきた。

日照りが見舞つていなければ、百姓家に泊まるという選択肢もありえた。そうすれば、宿泊した先の好意をあてにして食料も補給できただはずである。が、すべて思惑違いであつた。

源一はちらり、と背後を歩く時姫を確認する。

見るからにか細い身体つきのどこにこのよつた体力が隠されていたのか、姫は源一のいさか強行軍ともいえる歩きに文句も言わず従いつきている。

内心、源一は舌を巻いていた。

## 焚火

そういうするうちに人影は全て消え、見上げると空には、ちらほらと星が輝いてきている。

源一は立ち止まつた。

「この辺りで、野宿といたそう」

姫はうなずいた。

野宿には慣れてきている。街道を外れ、適当な茂みを探す。銀杏の大木の根本を野宿の場所と決め、時姫は膝を折つて座り込んだ。腰を下ろすと、溜息をつき、がっくりと首を垂れる。

痛ましつ感じつつ源一は姫の様子を見守つた。

やはり、この旅は相当姫にこたえてあるようじや……。

背負つたおーい 箕あいを地面に置くと、源一は中から小さな紙箱を手にとった。箱を引き出し、中にきちんと整列している細い木の棒を摘みあげる。

棒の先には薬品が付着していた。棒の頭を紙箱の茶色い表面にこすりつけると、ぱつと火花が散つて、棒の先が燃え上がつた。

それを大事に乾いた細枝に移し替え、焚き火を燃え上がらせた。二人の顔が焚き火に、赤々と染め上がる。

源一の仕草を、時姫は興味深げに見つめていた。

「不思議なもんですね。そんなことで火が点くなんて」

「南蛮人から買い求めたものでござる。南蛮人は、これを？燐寸？と称してござつた」得意になつて源一は答える。

時姫の声が弾んだ。

「源一は、南蛮人に会つたことがあるのですね！ どんな人たちなのです？ 姿と変わつたところはありますか？」

「見たところ、われらとそう変わり申さぬ。話す言葉も同じなら、顔形にいささかの変わりもありません」

源一は煙管を取り出すと、燃え上がる焚火に近づけ、一服ふかりと吸い付ける。

ぽんやりと時姫はつぶやいた。

「いつたい、南蛮人とは何者なのでしょう。あの者らは、どこから来るのでしょう」

「さあ、一度しつこく尋ねたことがござつたが、結局、はぐらかされてしまい申してござる。おそらくは異国ひがくにの者でござらうが、その異国がどこにあるのかさえ、見当もつきもつかぬでな」

ぽん、と源一は煙管を叩いて灰を焚火に落とした。次の瞬間、膝を浮かせ、太刀に手を掛けている。

「何者？ そこに隠れている奴、姿を見せよ」

鋭い叱声が飛ぶと、がさりと茂みがざわめいた。ひょろりとした姿の人影が焚火に姿を表した。

「おぬしは……」

源一は、あまりの意外さに絶句していた。立っていたのは河童の三郎太であった。

## 怒り

「おぬし、わしらを尾けてまいつたのか?」

源一は緊張した声を上げていた。いつでも刀を抜けるよう、右手は柄に漂わせている。

三郎太は、うつそりとした声で答えた。

「そんな面倒くさいことをするものか。あんたらに逃げるよう、忠告するため探していたんだ」

「逃げる? なぜじや!」

「」の村の連中、あんたらを捕えようと、山狩りを始めるつもりだ

源一は意外な三郎太の言葉に、呆気にとられた。

「わしらを捕える? わしらが何をしたといつのじや?」

三郎太は笑い声を上げた。けけっ、とこりうつうな甲高い笑い声である。

「源一さん、とか言つたな。あんた、水を求めるため、相手の言い値で金を払つたつ」

三郎太の言葉に、源一は憤然となつた。金を請求した百姓たちの顔を思い出し、腹が煮えくり返るのを覚える。

「当たり前じや! やつら、どうしても金を払わないと井戸を使わせないと言い張るから……」

「それが仇になつたな。あんたが氣前よく金を払つたもので、金を持つてゐる一人連が通る、という噂が、ぱつと広まつた。せめて、少しでも値切つておけばいいものを。それに、そのお姫様だ」

三郎太は時姫を見た。

「そこのお姫様、あまりに美しい。そこらの悪所に売り飛ばせば、いい金になると考える奴らも出でてきた」

なにいつ……！ と、源一は怒りに我を忘れていた。手は勝手に動いて、刀を抜き放つている。

たたた……！ と駆け出すのを三郎太が制した。

「待て、どうするつもりだ？」

源一は喚いた。

「知れしたこと！ わしのことは良い。したが、姫さまに対し、そのよつな悪企みを抱くとは、許せん！ 成敗してくれるわ！」

三郎太は処置無し、と首を振った。

「あんたは、どうやら腕が立ちそうだ。村の者が束になつたところで、どうてい敵うまい。しかし、噂になるぞ」

ぴた、と源一の動きが止まつた。

「噂？ なんの噂じゃ？」

「綺麗な娘と、腕の立つ老人の二人連れ、という噂だよ。そのような剛の者、いつたいどこから流れてきたのか、みな不審に思うだろうな。あんたら追われているのだろう？ それなら、無用な噂の火種になる振る舞いは、避けるべきではないか」

くくくく……と、源一は歯を食い縛っていた。悔しいが、三郎太の言葉は真を衝いている。どうにか気を落ち着かせ、源一は刀を鞘に戻した。

三郎太は、じっと耳を傾けていた。

「聞こえないか？ 山狩りが始まつたようだな」

源一は伸び上がり耳を澄ませる

暗闇に、微かに呼び交わす声が聞こえてくる。源一は声を聞き取るなり、焚火を踏みにじつた。

予想外の焦りに、汗がどつと噴き出してくる。

「源一……」

時姫が声を震わせる。

源一は焚火の始末に余念が無い。

ようやく火が消えたのを確認して、源一は顔を上げた。火が消えたこの場所は、真の闇に包まれている。三郎太や時姫の姿も、黒々した塊にしか見えない。

「姫さまー、逃げまするぞー！」

うん、とうなずいて時姫が立ち上がる気配。が、足音が乱れた。よろけたらしい。はつとなつた源一だったが、時姫の腕を三郎太が先に支えていた。なにを……と言い掛けた源一だったが、次の三郎太の行動に言葉を失つた。

「これでは走れんな。疲れ切つておる」

いきなり三郎太は時姫を抱き上げた。はつ、と時姫の息を呑む気配。ついで激しい息遣いが聞こえた。姫も驚きで言葉が出ないのか。

「源一、走るぞ！」

いつの間にか三郎太は、命令口調になつていた。一瞬、源一は刀を抜いて三郎太を一刀の下に斬り捨てよつかと考えた。が、時姫が三郎太の腕にあることを思い出す。さつと三郎太は姫を抱えたまま走り出した。慌てて、後を追いかける。

源一は、唇を噛みしめた。

なんという後手に回るのか？ これでは、この三郎太とか名乗る河童に、良いように鼻面を取つて引き回されているだけではないか！

姫の身体を抱き上げているところの山、三郎太は飛ぶように闇を走っていく。

微かにぺたぺたといつ足音が前方から聞こえ、それを頼りに、源一は後を追う。

もとより源一とても、姫を抱き上げて走る程度はなんでもない。しかし、今の三郎太と同じ速度で走れるかどうか、若にこうならともかく現在では自信がなかった。

姫はすっと押し黙つたままだ。抱き上げられたとき、悲鳴すら上げなかつた。

しばらく無言の時が流れた。

「ここまで走るつもりじゃ？ 第一、二二三、一二二二辺なのじゃ？」  
とうとう沈黙に耐えかね、源一が口を開いた。

「夜明け前には、安全な所に着く。今、走っているのは、山の中だ」暗闇から三郎太の平静な声が響いている。姫を抱き上げ、さらに飛ぶように走っているというのに、その声に震えは微塵も感じとりなかつた。

山の中……。

源一は空を見上げた。

雲はない。一面の星空に、時折は梢が通りすぎ、ちらりちらりと見え隠れする。確かに、山の中を走っているようである。

「しかし、妙じゃな

「何が？」

「村の連中のことだ。金が欲しいというのは判る。じゃが、旅の者を襲つてまで手にしたいと思うとは。わしは、この辺りを知つておるが、それほど人気が悪い場所ではなかつたよつて思つ」

「緒方上総ノ介という領主を知つておるか？」

三郎太の言葉に、源一はちょっと首を捻つた。

「上総ノ介？　聞いた覚えがある。この辺りを治めておる領主じゃな。じゃが、もう八十に近い歳ではなかつたか？」

「その息子のほうだ。息子が家督を相続して、上総ノ介を襲名した。この息子がえらく働き者でな。ちまちまと、あちこちに出張つては、領地を稼いでおる。そのため、出来星の家臣が増えて、郎党を募るため流れ者が続々と集結した。以来、この辺りは無宿人、やくざなどの集まる村になつたのさ」

源一は驚いた。

「おぬし、何者じゃ？　ただの河童にしては、ちと物を知り過ぎておる」

「なに、おれも少々あちこちを流れ歩いているから、こんなことも耳に入るようになったんだ」

「おぬし、なぜあんな所で倒れておつた。河童があんなところで暮

らしているなど、聞いた覚えがないわ」

「探していたのだ」

「何を？」

「河童だ。おれたちは、この近くの河童淵という所に住んでいる。だが、他の場所に住んでいる仲間のことは、何も知らぬ。おれたちは年々、数を減らしている。原因は色々考えられるが、同じところで仲間同士で暮らしていく、血が薄まつたと、おれは考えた。そこで、他の場所に住んでいる河童を探しに旅に出たのだ」

「それで、見つかったのか。仲間は」

いや　と、三郎太は否定した。

「どにも、他の河童はおらなんだ。おれは、それこそ、北から南まで探し歩いた。が、河童の噂は、欠片もなかつた」

三郎太の声には沈痛な響きがあつた。

源一は三郎太のある口調が気がかりになつた。

「おぬし、時々ふつと妙な口振りになるのう。時折、京に来る、南蛮人のような喋り方になる」

はつ、と闇の中で三郎太の息を呑む気配があつた。再び口を開いた三郎太は、用心深い口調になつていて。

「そんなに似ているか？ その……南蛮人とやらに」

「ああ、こうして闇の中を走つていると、お前が河童だということを忘れ、南蛮人と話しているような気になるわい。おい、どうした？」なぜ黙る？」

三郎太は、それきり黙りこくつている。沈黙は硬く、手に触れそうであった。

源一も口を噤み、走る「」とに専念していた。

夜明けが近づき、山中の木々が朧に見分けがつく状況になつてき  
た。杉林に入つたらしい。間伐がされていないと見え、杉林は鬱蒼  
と暗い。

「なんじゃ、これは？」

杉木立に纏いついている妙な印に、源一は思わず声を上げていた。  
一本の縄が数本の杉に架け渡されている。縄には所々、萎びた胡  
瓜がぶら下がつていた。胡瓜が御幣だつたら、これは注連縄である。

河童の神籬ひもうきか……。源一はやや皮肉な気分で、それを見上げる。

三郎太の腕に抱え上げられたまま、時姫は縄にぶら下がつて  
いる胡瓜を見上げた。黄色く変色した胡瓜は、今にも千切れ落ちそう  
である。

「結界だ。」この結界を越えて山に入ることは、里の者に禁じてある  
「なんの結界じゃ？」

「河童の結界だ。」ここから先は、河童の領域なのだ。もし許しがな  
く里者が入り込めば、我らの報復を受けることになつている。そう  
いう約定なのだ」

その言葉に源一は、大きく頷いていた。なるほど、だから安全な  
場所だと言つのじゃな……。

三郎太は抱えていた時姫をすとん、と地面に降ろした。一瞬、姫  
はふらついたが、それでもしっかりと地面を踏みしめる。

ありがとう……と口の中ですぶやいた。興奮が残っているのか、頬が赤い。

三郎太は腕を挙げ、森の中を指さした。

「ここから真っ直ぐ進めば、廃寺が見つかるだろ。荒れではいるが、住むには充分だ。あとは、あんたらだけで行けるな？」

「つむ、と源一はうなずいた。

「いろいろ済まぬな。世話になつた」

思いついた、といった様子で、三郎太は言い添えた。

「あんたらのことば、仲間に言つてある。だから、あんたらに限つてなら、結界を通ることは自由だ。しづらぐじいで、ほどほりを冷ますなりするが良い」

返事も待たず、三郎太は木立に分け入り、そのまま姿を消した。がさがさという茂みが搔き分けられる音がしたかと思うと、静寂が戻つてくる。

最初に出来つたときと同じく、別れの挨拶も無く、だしぬけに去つていく。

「ほつ、と時姫は、溜息をついた。

「すっかりあの方に助けられてしましましたね。お礼を言つ暇もありませんでした」

姫の言葉に源一は苦笑いになった。

まったくもつて、その通りである。しかし、そんな感情を振り捨

て、口を開いた。

「参りましようず。ともかく、あれの教えてくれた廃寺の場所を確かめぬと……」

微かな踏み分け道を登ると、程なく三郎太の言つて廃寺が見つかつた。

やや開けた平らな場所に、まさに崩れ落ちかうになつて小さな庵が結んである。柱は傾いて歪み、屋根は落ち、壁には大きな穴が穿たれていたが、それでも山寺であつた。

裏手に回ると、以前の住持が耕していたらしき畑の後が残つている。これなら、なにか作物を育てる事もできる。源一は内心、ここに腰を据える覚悟を固めた。

わつ、といつ時姫の驚愕の声に、源一は振り向いた。源一！ と、時姫が興奮した声で呼んでいる。

何事かと表に回ると、姫が寺の縁側を指さしていた。指さしながら、まるで小娘のようにびょんびょんと飛び跳ねる。

源一は、呆れた。

まるで姫さま、ここに来られて童女のこころにお戻りになられたようじゃ……。

「源一、あれ！ あれを見て！」

指さしたのは笹の葉の上に置かれた数尾の魚である。鮎らしい。まだ獲れたてらしく、田は青々として、鱗が日差しに銀色に輝いていた。

魚の隣には袋があつた。

持ち上げると、ずつしりと重い。袋の口を開けると、中には米が詰まっている。

「食べ物でござるな。魚と、米。これを食えといふ謎かけでござりますか?」

「あの三郎太が持つてきてくれたのでしょうか?」

嬉しげな姫の声に、源一はやや不機嫌にうなずいた。

「他にはござらん。あやつめ、我らに恩を売るつもりでござるわ」

源一の声の調子に、時姫は眉を顰めた。

「どうしたのです? の方の親切に、なぜそのような態度になるのです?」

源一は思わず恥じ入った。

そうだ、なにを自分はうづくじしているのだ。かつては北面の武士として武勇を鳴らした自分ではなかつたか。

姫に振り返つたときには表情を緩め、いつもの自分に立ち返つていた。

「まさに、姫さまの仰られる通りでござつた。さて、寺の中に調理できるような道具なりとも探しよしうづ」

がたびしと軋む戸を引き開け、中に踏み込むと床板に囲炉裏が切つてあつた。部屋の片隅には様々な家財道具が積まれている。

鍋、鎌、鉈、鍬、鋤、包丁など、生活するつえで必ず欲しくなりそうな物が、あれこれ並べてある。

前の住持の持ち物であったのか。あるいは三郎太が気を利かして、ここに持ち込んだのか。多分、後者である。

一人は手分けして、ここに心地よく住めるよう、掃除を始めた。

源一が枯れ草を束ね、即席の簾を作る。時姫は腕まくりに襦袢を端折り上げ、掃き掃除を始める。

主従の生活が始まった。

廃寺に一人が住まうよつになつて幾月かが過ぎ去つた。茹だるような夏は、冷んやりとした秋口の日々に席を譲つた。山の中に山菜を探りに行つた帰り、源一は寺の庭に姫が座り込んでいるのを目にした。

姫の屈みこんでいる前には、一匹の獸がうずくまつてゐる。小さな、猫ほどの大きさの生き物である。

しかし、すらりとした獸の姿は、猫ではない。白に近い茶褐色の毛並み、くりくりとよく動く目。鼻先は尖り、髪は忙しくぴくぴくと動いている。

管狐であった。

形は狐に似ていたが、ただ一点だけ狐と違つのは、耳の形状がひどく人間に似ているところだつた。ピンと立つた狐の耳ではなかつた。

「そう……そんなことがあつたの……」

姫は管狐に話しかけ、時折けらけら弾けるような笑い声を上げていた。管狐は姫になにか報告するように手足を激しく動かし、尻尾をぱたぱたと振つている。

背中に背負つた山菜の籠を下ろしながら、源一は時姫に声を掛けた。

「？ぐだ？をお呼びになられたのか……」

源一の言葉に姫は顔を上げた。うん、とうなずいて立ち上がる。

そんな姫の顔を、源一は眩しく見つめた。

時姫はこの山寺で暮らしが始めて、大きく変わりつつあった。

抜けのような白い肌はそのままだが、血色が良くなり、頬に赤みが差している。動作は機敏になり、よく笑うようになった。日差しの中を歩き回るのが良かつたのだ、と源一は満足げにそんな姫の変わり様を嬉しく思っていた。

「京の様子を聞かせて貰つていたのです。関白殿がお替りになられたとか……」

管狐は人間の言葉を理解する。しかしその言葉を聞くことができるのは【聞こえ】の力を持つ信太一族の者に限られていた。自分の用が済んだと判断したのか、管狐はぴょんと跳ねて、茂みに姿を隠してしまつ。

管狐の後姿を見送り、源一は話しかけた。

「京が恋しうつうやるか？」

「ううん、と姫は首を振つた。

「京にいたころは、妾はずつと籠の鳥みたいなものでした」

籠の鳥……。そんなことを考えていたのか。源一は改めて、姫の変化を痛感していた。

## 疑惑

時姫は源一の手に持っている枝に目を止め、指さした。

「それは、なに?」

「ああ、これでござりますか。五加皮の枝でござりますわい。これを火にくべ、湯に入れて煎じれば、茶になり申す。胃の働きが良くなり、通じも楽になります。山菜採りの合間に目にし、五加皮茶でも点てましょかと参りました」

まあ……と時姫は笑顔になった。

「野点のだて、ですね。源一も、風流なところがあるのでですね」  
時姫は寺に入り、さつそく茶の用意をする。用意を待つ源一は、縁側に腰を下ろした。

のんびり景色を楽しむうち、ひょろりとした影を見つけ、微かな不安が胸に湧いた。影は、三郎太であった。

背中に日差しを受け、半身が影になっている。手にはそちらで掘り返したのか、土のついたままの長薯を下げている。

三郎太は、ちょくちょく訪ねるようになっていた。訪問するたび、木の実だとか、川魚だとかを手土産に持ってきてくれるので、それは有難かつたが、源一は微かな疑惑を三郎太に抱いていた。

無言で近づくと、長薯を持った手をぐいと突き出した。源一は顔を顰めた。

「まあ、三郎太！」

背中で時姫の弾んだ声がする。振り向くと、姫は目を輝かせ、三郎太を見つめていた。

縁側から庭に降り、草履を履くと、いそいそと三郎太に近づいた。三郎太の持っていた長襦に気付き、袂で受け取った。

ぐるりと源一に振り向き、口を開いた。

「源一、三郎太が長襦を持ってくれました！ 夕餉は、どうにいたしましょう」

源一は無言で頷いた。

秋の日差しに時姫と三郎太が並んで立っている。その光景に、源一の胸のうちに、小さな氷に似た疑惑が育っていた。

まさか、な……。

源一は急いで淡い疑惑を打ち消した。

縁側に碁盤が出されている。

源一は黒石を一つ手にし、ぱちりと井戸に置いた。三郎太も白石を手に打つた。

ひとしきり、ぱちり、ぱちり……と一人の碁の勝負が続いた。

庫裏で見つけた碁盤に、源一は喜んだ。京の都にいたころは、さんざん打つたものである。

しかし、ここでは相手になる者がいないと嘆いていたが、なんと三郎太が心得があると言つてきた。つくづく妙な河童であると、源一は思つていた。

時姫が源一に五加皮茶ハレヅキ茶を淹れて持つてきた。三郎太には湯冷ましを出した。

河童は熱いものは口にできぬと言つので、時姫は湯冷ましを用意するようになつてきている。

時姫から湯冷ましを満たしたぐい飲みを受け取ると、三郎太は礼も言わず、じくりと飲み干す。そんな三郎太を、時姫はじつと見つめていた。堪らず源一は声を掛ける。

「姫さまも、一つお飲みになれますか？」

「はい、頂きましたよう」と時姫は、熱い茶を満たした湯呑みを手に持つた。

口元に近づけたその時、姫の顔色がすうつと青ざめた。

じりりと湯呑みが板敷きに転がり、中身の茶が零れて染みを作る。はつ、と源一が見ているうち、時姫はうつと口を押さえ立ち上が

つた。早足で裏手に駆け込むと、その場で蹲つた。

「どうしたのかしら……なんだか、お茶の香りに、込み上げて……」  
弱々しく笑う。

源一の胸の氷が、一層の厚みを増した。

かつて源一は妻を持っていた時期があった。その期間は短かったが、源一の唯一の甘い想い出であった。

その妻は身籠り、やがて月満ちたが、子供は死産だった。妻もまた子供と運命を共にした。それ以来、源一のなにかが喪われたのである。

その記憶が蘇つてくる。

「……  
悪阻ではないか……」

源一の胸のうちに、ずっとじっと氷は居座っていた。

## 永楽銭

年が変わり、春になつて、源一は里へ降りて行つた。背中に薪炭を背負つてゐる。冬の間、源一は山で炭焼きをして過ごしていた。この炭を村で売るつもりである。

金子は京を脱出する際に笈に用意してあつたが、うつかり更の永樂銭を詰めてきたのが間違いであつた。

この辺りでは縁の欠けたり、表面が鱗割れた、いわゆる鎧銭をやりとりするのが普通で、新鑄の銭など見たことのない人間が圧倒的大多数である。そんなところで水を求めるため新品の永楽銭を使つたのが裏目に出で、あの山狩りとなつた。

源一は炭焼きで生計たづきの道を立てるつもりであつた。それに、炭焼きの親爺となれば、他人の詮索の目を引きにくい。

月代はわざと剃らず、髭も伸び放題に伸ばしている。背中に負つた薪炭の重みが、自然と背中を曲げ、北面の武士としての堂々とした振る舞いも隠してくれる。まさに、むさ苦しい炭焼きの親爺の姿であつた。

村に入つて最初の驚きは、関所がないことであつた。普通、関所は様々な所に設けられており、通過するたび関所役人に何がしの礼金を献上しなくてはならないのだが、領主の緒方上総ノ介は総ての関所を全廃させたと聞く。

理由は、関所があるために商人が集まりにくく、上総ノ介は自国を富ませるために関所を全廃させたのだそうだ。

村に入ると、市が立つていた。それも、相當に大規模なもので、

京の都でもこれほどの人出は、源一は目にした記憶がなかった。

「これは？ 楽？ というものに違いない……。」

市を立てるために鑑札が必要である。鑑札を発行して貰うためには膨大な運上金が必要だが、その鑑札も上総ノ介は全廃させていた。上総ノ介の狙いは見事なまでに図に当たり、商いを求める商人は領内に続々と集まつてくる状況になる。

村を見下ろすようにして、山の中腹に城が建設途中の姿を見せている。落成途中であつたが、源一の見たことのないほどの規模で、幾人もの大工が足場を組んで盛んに作業をしている。緒方上総ノ介支配の豊かさを象徴するような巨城であった。

市の端に源一は荷を降ろし、地面に座り込んで客待ちをする」とした。煙管を取り出し、口に咥える。

表情はわざと緩め、ぼんやりとした体を装っているが、源一の田は機敏に動いて、辺りに気を配っている。

ほどなく客がついて、源一の炭はたちまちに売り切れた。市には物を売るだけでなく、様々な料理を出す店が並んでいて、それらの主人が薪炭を求めていたのである。

代金を懐に捻じ込み、源一は立ち上がった。冷やかしの客を装っているが、その心中には嵐が巻き起こっていた。

姫はあれから腹が目立ち始め、すでに臨月を迎えていた。源一は墮ろすべきだと説得したが、時姫は頑として聞き入れなかつた。

「どのような赤子が生まれてくると思ひ出す……。源一の言葉に、姫は頭を振つて答えた。

「どのような赤子でも、三郎太様の子供です。妾は命に懸けても、

守ります……」

きつぱりと答える姫の顔は誇りに満ち、幸せに輝いていた。

「三郎太様」と姫は呼んだ。その言葉には限りない愛情がこもつている。

どうすればよい……。

懊惱が源一の注意力を削いでいたようだ。肩をぽん、と叩かれるまで、その男の接近に気付かなかつたのは、迂闊と言つべきだらう。

「猿の源一さんじゃないか?」

ぎくりとして、源一は声の方向に身体をねじ向けた。

ひょろひょろとした瘦身の男が薄ら笑いを浮かべて立つていて。やや猫背の男は、覗き込むような目つきで源一の顔を穴の開くほど見つめていた。

身につけているのは着流しに、だらりとした綿入れで、月代は剃らず巣りにしている。細身の刀を落とし挿しにして、遊び人風であった。

男には頬に目立つ傷跡があつた。その傷跡のせいで、男は常に引き攣つたような薄笑いを表情に刻ませていた。

源一は一瞬にして、男の問いかけをはぐらかすことの無意味に気が付いた。すでに相手は源一の正体を見抜いている。

「啄木鳥の甚助だつたな。確か」

にやり、と甚助と呼ばれた男は笑いを浮かべた。微かに顎を擧げ、連れ立つように合図をすると背中を向け歩き出す。

源一は、その後に続いた。

城の作事場がよく見える茶店に、甚助は源一を案内した。どうやら城の作事見物は、この辺りの住民の良い娯楽になつてゐるようだ、店は賑つていた。

「珈琲を頼む」

店の娘に甚助は横柄に命じた。赤い前掛けをした娘は「珈琲ひとつ！」と独特の口調で奥へ声を掛ける。程なく甚助の注文が運ばれてくる。

これが、珈琲か……。

噂では聞いていたが、見るのは初めてだった。

薄手の磁器の茶器の中で、薄墨のよつた真つ黒な液体が湯気を立ててゐる。南蛮人が持ち込んできた色々な物の中に、珈琲も入つていた。

甚助は珈琲に、白い液体と砂糖を入れて、金属製の茶匙で掻き混ぜた。真つ黒な液体が、泥のような茶色に変わる。

「それはなんじゃ、豆乳かの？」

牛乳だ、と甚助は答えた。牛の乳なのだ、と説明する。それを聞いて、源一はうへつと首を竦めた。

耕運機の乳を飲むとは、とうてい信じられぬ！ まさか、汽油脂のことか？

甚助は「いやいや、その？うし？ではない。生き物の？牛？なのだ」と言い足した。説明をされても、さっぱり源一には判らない。

甚助と源一は奇門遁甲を能くする御所の侍組の仲間であった。しかし、肝心の御所の内部で続く権力争いのため、組はばらばらに分裂し、嫌気をさした源一は信太従三位の誘いに乗る気になつたのである。

甚助とは、あまり組んだことはなかつた。それでも、ちょくちょく甚助の噂は耳にしていた。それも、良くない噂ばかりである。曰く、おのれの腕前を鼻に掛け、他人に酷薄な性格である。曰く、欲が深く、狡賢い……。ともかく、朋輩にするには相応しくない、という最低に近い評価であつた。

その、甚助が源一に声を掛けた。

何が狙いか、まるで判らぬが、うかつがと乗らぬ」とじや……。

源一は作事場を眺めた。

城の石垣を組むため、沢山の傀儡くぐつが働いている。これ程の数の傀儡が働いているのを、源一は初めて目にしていた。

繩張りを見て、源一は内心首をかしげた。

城の構造は熟知しているが、どうにも見慣れぬ形だった。城の前面にあたる斜面が大きく切り開かれ、なだらかな坂になっている。その先が湖になっていて、完成途上の城の姿が鏡のような湖面に映つている。

見とれている源一に甚助は話しかけた。

「大きい城じや ろう? 破槌城はうちじやといつのじや」

「破槌……? と問い合わせる源一に甚助は指で字を書いて教えた。

「この村も殿が破槌と改めた。前は井ノ口とか言つたが、そう名を改めたのじや」

美味そうに珈琲を飲み干すと、甚助は上目遣いになつて、そつと顔を近づけてきた。

「源一さん。あんた今、何をしている? 炭焼きの親爺だけかい?」「当たり前じや。ほかに何があろうか」

くつく、と甚助は引きつったような笑い声を上げた。

「そんな与太話を、おれが信じたのかね。ちょっとばかり、面白い噂を耳にしたんでね。京の信太屋敷から、娘が一人、出奔し

て、それつきり誰も行方は知らない……。面白いとは思わないか」「思わんな。それが拙者に、いつたい何の関係がある?」

「その時、ひどく腕の立つ従者が一緒に逃げ出した、と噂に聞いたんだがね。それが実は、あんたじゃないかと、睨んでいるんだ」

「知らん」と源一は首を振った。

「それより、お前にそ、何処で何をしておるのじゃ。まだ素破、乱破仕事に未練を残しておるのか?」

甚助は得意げな表情になつた。

「おれか? おれは、いつ見えて、この緒方上総ノ介配下の家臣に仕えておる。だからあんたに声を掛けたんだ。あんたと組めば、面白い仕事ができそうだ」

「断るー」と源一は言下に首を振った。

その時、甚助の胸の当たりで「ぶぶぶ」という奇妙な音が響いた。「あ」と甚助は懐に手を入れ、印籠のような形状の道具を取り出した。

ぱちりと貝殻のように開くと、耳に押し当てる。

「はい、甚助でござる。はあ、はあ、殿が……承知!」

印籠を懐に収めると、甚助は立ち上がった。作事場に向け、大声を張り上げる。

「皆、聞けえーっ! 今より殿がお通りになられる! 道を空けろーっ!」

甚助の大音声に、傀儡や作業中の大工は慌ててその場を離れていく。

源一は呆気にとられていた。一体全体、何がおきた?

次の瞬間、さつと勢いよく建設中の城門が開かれ、そこから二輪車の爆音が響いた。

真っ黒な塗装の一輪車が飛び出した。一輪車には一人の若者が颯爽と跨っている。

片肌を脱ぎ、兜も被らず、髪は茶筅に結つてある。後から数名の徒步の者が脛を飛ばせて走つていく。

若者は一輪車の棍棒を一杯に開いて、全速力で駆け抜けた。

「あれが、上総ノ介殿だ」

甚助の解説の言葉に、源一は驚いていた。まだ青一才ではないか。

徒步の最後に、瓢箪を抱えた貧相な男が、せかせか駆けて行く。  
顔を真つ赤に染め、遙かに遠ざかつて行く一輪車を追いかける。瓢  
箪には機能水スポーツ・ドリンクが詰まっているのだろうか、ひどく重そうである。

「そして、あれが、おれの仕えている木本藤四郎越前ノ守さまだ。  
ああ見えて、上総ノ介様の信任が篤く、家臣の中で異例の出世をな  
しとげたお人だ。あの人の配下でいる限り、おれもいつかは城持ち  
になれると考えている……」

源一は甚助の懐を指差した。

「今さつき出した小道具は、何じゃ？」

「ああ、これが」

甚助は、さつきの印籠を取り出した。表面はつるつとして、真ん中から二つに割れるような蝶番があつた。

「無線行動電話ケータイと南蛮人は言つておつたな。これで、遠くにいる相手と話すことができるのだ。さっぱり理屈は判らぬが、しごく便利な道具じや。さきは、あの藤四郎様が殿が一輪車をお責めになるので、道を空けよと命じたのだ。あの一輪車は上総ノ介殿の一番のお気に入りで？千載？という名をお付けになつておる」

「南蛮人が、ここにも参つておるのか？」

源一の質問に甚助は「いけねえ！」という表情になつた。うつかり口を滑らせた、といった体だが、源一は信じなかつた。甚助の言葉には、すべて裏がある。

「なあ、源一さん。おれの話に乗る気はないのかね？ あんた程の腕前の持ち主が世間に埋もれるのは惜しい。そうじやないか？」

源一は立ち上がつた。

「拙者に構わんしてくれ！ 一言、念を押しておく。良いか、もし二以上しつこく付き纏うつもりなら、こちらにも覚悟があるぞ！」  
本気だった。源一は殺氣を込めて甚助を睨みつける。

一瞬しげしげと真顔になる甚助だが、すぐ笑い顔になった。

「怖や、怖や……源一殿の殺氣は物凄い……」

剽げた様子で甚助はつぶやいた。

源一はぐるりと背を向けた。物も言わず去つていく。

しかし奴が諦めるとは思えなかつた。源一は、甚助の執念深い視線が背中に貼り付いているのを感じていた。

## 陣痛

後を尾けられていないか確かめるために手間取り、源一が山寺に辿り着いたのは、紅月が山の背に登つたころだつた。

今月は紅月だけで、藍月は出でていない。藍月と紅月が同時に空にあるのは、一年の内の三分の一程である。そんな時は一つの月の色合いが交じり合い、この世のものとも思えぬ幻想的な影ができる。

赤々とした紅月の光に、源一の胸は騒いだ。

結界を通り過ぎるとき、千切れそうになつている注連縄に気付いた。すでに胡瓜は地面に落ち、残つた縄だけがぶらんと結界の残骸となつている。

これで、結界と言えるのか。微かな不安が湧く。

「源一！ デコへ行つていた？」

三郎太が目を一杯に見開いて飛び出して來た。

「何があつた？」

源一も叫び返した。三郎太の様子は只事ではなさそうである。  
「姫が……産まれそうだ！」

なにいつ！

源一は寺に急いだ。

「湯を沸かせ！ 桶を用意せい！」

口早に命令する。ところが、三郎太はおろおろ右往左往するばかりで、まるで役に立たない。

源一は戸を荒々しく引き開けた。

「姫！」

寝床から時姫が顔を持ち上げた。顔色は真っ赤で、肩で息をしている。

「源一、産まれそうです……」

「うーつ、うーつ……と陣痛に顔が醜く歪む。

「早過ぎる……くそつ……」

源一は急ぎ姫の側に跪いた。時姫は込み上げる陣痛に身を反らせ、床に延べた布団を掴んで、必死に耐えている。  
「うなつては自分が赤子を取り上げるしかない……。源一は覚悟を決めた。

よつやく三郎太が、湯を用意してきた。

時姫の妊娠がはつきりして、三郎太は山寺に泊まり切りになつていた。河童と言えども、人並みの父親としての自覚はあるらしく。「姫、それがしが赤子を取り上げますぞ！ よろしいか？」

うん、と姫は頷いた。すでに苦痛で、返事をする気力もない。

「よし……三郎太、おぬしは姫の手を握つておれ！ さあ、姫……大きく息を吸つて……そうそう、ゆつくりでござる。息を吐くときも、ゆるりと気を静めるのじや……よろしい、産まれますぞ……」  
ああーっ、と声を立てず、時姫は大きく背中を反らせた。全身にびつしりと汗が流れている。

源一はゆつくつと手を伸ばし、そーっと時姫の膣内に挿入した。

指先に、赤子の頭が触れる。力を込め、五指で挟み付けて、ゆるゆると引っ張る……。

おぎや あーつ！

力強い、産声が山寺を満たした。  
ほかほかと湯気を立てる真つ赤な塊を、源一は取り上げた。

「姫つ！ 男の子じや！」

両腕で赤子を抱え、源一は喜色を上げた。  
紛れもない、人間の赤ん坊である。心配した頭の皿など、どこにも見当たらない、人間の子供であつた。

源一は手早く臍の緒を始末する。

時姫は両腕を伸ばし、源一の腕から赤ん坊を受け取つた。胸をはだけ、赤ん坊に乳を含ませる。「ぐん、ぐんと音を立て、赤ん坊は母の乳を吸い込んでいる。

ほのぼのとした幸福感が、その場を支配した。

「名前を付けなくてはな……」

時姫の手を握った三郎太が、つぶやいた。

「三郎太殿の一字を貰い、時太郎といつのは、どうでしょ？」

時姫の答に、三郎太は笑つた。

「良い名だ……。時太郎、おれの子供だ！」

赤ん坊の顔を覗きこむ。

と、その目元を指差す。

「痣があるな……」

ああ、と時姫は、うなずいた。

「その痣は、信太一族の男には必ず現れる徵なのです。妾の父御にも有りました。すなわち、信太家の徵……。この子は紛れもなく、信太家の男児ですわ」

「三郎太、抱いてみよ」

源一の提案に三郎太は仰天した顔つきになった。

「おれが、か？」

「そうじゃ。おぬし、父親になつたのである？？」

恐々と三郎太は、時太郎と名づけられた赤ん坊を壊れ物を扱うように時姫から受け取る。源一は助言した。

「肩に担ぐのじゃ。そして背中を叩いて、げっぷをさせてやれ……」

とんとんと三郎太は赤ん坊の背中を優しく叩く。げっぷつ、と赤ん坊がげっぷをする。

ほつ、と三郎太の顔が綻んだ。

直後、赤ん坊は背中をぐーっと反らし、全身に力を込めて泣き出した。

『あああーっ！

驚くほど大きな泣き声であつた。三郎太は、ぎょっとなつた。  
「ど、どうした？ おれが、何かしたか？」

時姫がつぶやいた。

「？ 声？ が満ちてあります……。敵意に満ちた？ 声？……。源一、  
これは敵です！」

田を見開き、顔色は青ざめていた。

源一は、さつと身を翻し、口を僅かに開いて外を覗き込んだ。  
ひしひしと軍勢が山寺を取り囲んでいる。

尾けられていた！ なぜだ？

充分過ぎるほど、注意してあつたはずなのに……。

源一の田が部屋の中に漂う、微かな銀線を捉えていた。田に見えるか、見えないか、ほとんど判別できないくらいの細い糸である。あつ、と源一は立ち上がり、上着を脱ぎ捨てた。こりりと小さな虫が床に転がる。

摘み上げると、豆粒ほどの蜘蛛である。蜘蛛は干乾びて、死んでいた。

しまつた！ 標蜘蛛じゃ！

奇門遁甲の技に、虫を使う技がある。蜘蛛の糸を吐く器官に傷をつけ、死ぬまで糸を吐き出させる術があった。甚助は源一の上着に、その術を施した蜘蛛を付着させたのだ。

「三郎太、結界はどうしたのじゃ？」これは河童の結界に守られておるのではなかつたか？」

「ぐぐり、と三郎太は唾を呑みこんだ。

「それが……河童は忘れ易い生き物なのだ。最初の、里人との争いで結界の約定が決められ、それ以来ずっと揉め事は何も起きなかつた。それ故、河童の大多数が結界の存在も意義も忘れ果ててしまつてゐる……。おれがお前たちのことを頼んだときも、仲間たちは結界のことを完全に忘れていた……」

がつぐりと首を垂れる。

ええい、役立たずが……！

立ち上がり、今まで手にすることもなかつた刀を握る。京を脱出するとき身につけた鎧帷子を取り上げる。

ぐるぐると身は動き、戦支度を整える。

「時姫様！ 三郎太！ 覚悟はよいか？ この囮み、どのよつにしても脱け出ようぞ！」

三郎太は強くうなづく。時姫の手をとり、立ち上がらせる。産後の時姫は、さすがに辛そつである。

源一は死を覚悟していた。

「甚助、囮みは充分だ。早く、懸かれの下知をせぬか！」

苛々と顔中に鬚を蓄えた大男がつぶやいた。

「まあ、待て」と啄木鳥の甚助は答える。

目の前に、紅月の仄かな赤みがかつた光に照らされた山寺が見えている。

相手は猿の源一。用心し過ぎるとこいつとはない。

「ぶぶぶ……、と懐の無線行動電話ケータイが微かな震動音を立てた。ぱちりと開くと、画面に「電子矢文あり」メールと表示されている。開くと

東、用意よし

西、用意よし

と、あつた。

甚助たちは南側を囮んでいる。北側は、わざと手薄にしている。こちらから攻め立て、北側に誘い出す作戦だ。

もつとも、源一ほどの手練れがこんな子供だましの作戦に乗るとは思えないが。

それにも、先程の叫び声は何だったのだろう？ 何だか、赤ん坊の泣き声みたいだったが。

甚助は周りの男たちに向け囁いた。

「よいか、目的は信太従三位の娘、時子ただ一人。決して、殺してはならぬ。生かして、都へ連れて行くのだ。首尾よく時姫を京の【御門】に会わせることができれば、恩賞は思いのままと知れ！」

甚助の言葉に、男たちはうなづいた。

村で源一を見かけ、甚助は直ちに信太従三位の娘と結び付けていた。奇門遁甲の仲間がばらばらに散つたとき、源一が繁々と信太屋敷に伺候していたことを甚助は思い出していた。

必ず、あの中に時子がいる！ それは確信だつた。

源一が立ち去つた後、甚助は流れ者、半端者を集めて今夜の襲撃を計画した。主人である木本藤四郎には内緒であった。こつそりと事を運び、すべて終わつた後報告するつもりである。

藤四郎に言上すれば、すぐさま正規の兵を集めることができるであらうが、それでは甚助の眞みというものが全然ない。

うまく立ち回れば、木本藤四郎を飛び越え、一気に緒方上総ノ介に取り入ることも可能である。

いや、もしかしたら【御門】と直接取引きができるかも。

仲間になつた男たちを見やり、甚助の胸に微かな不安が湧いた。こいつらで、大丈夫だらうか？

集まつている男たちは、皆、思い思いの装備に身を固め、腕を撫している。一目ちらつと見ただけで、到底、まともな稼業とは思えない格好だ。山賊と紙一重、いや山賊そのものの暮らしをしていた連中も多い。

緒方の領土拡大に、新参の家来が必要になつて、諸方から続々と仕官を目当てにやってきた連中である。しかし仕官にあぶれ、不満を持つっていたのを、甚助が声を掛けたのだ。

あぶれるのには、大きな訳がある。

戦に必要なのは勇気ではない。無論、腕力でもない。必要なのは、留まれと命令されれば石に齧りついても留まる愚直さであり、引けと命じれば、目の前に止めを即座に刺せる敵がいても、未練なく引ける忠実さである。

「こつらは、ただおのれの腕自慢、それだけで、知恵などは欠片もない。あるのは下劣な欲望だけである。

甚助も同じようなものだが、それでもおのれの欲望を包み隠す程度の知恵はあった。

まあ、いい。とりあえず頭数は揃った。不測の事態があつても、甚助はなんとか対処できる自信はあった。

さつと甚助は手を挙げた。

男たちは、一斉に立ち上がる。

弓

「待て！」

急いで甚助は制止した。

山寺の屋根、煙り抜きに人影を認めていた。

あれは……源一だ！

手に弓を持っていた。

源一は屋根に立ち上がり、きりきりきりと弓を引き絞る。一杯に引くと、

ちゅう！

とばかりに一矢を放つ。

次の瞬間、ぎやあと叫び声を上げ、一人の男が仰け反った。胸に深々と矢が突き刺さっている。

わっ、と男たちは浮き足立つた。慌てて弓を取り、矢を番える。と思ったら、もう矢を放つている。矢はひょろひょろと飛んで、屋根に力なく突き刺さった。

馬鹿者どもめが……。

甚助は苦りきつた。

源一は屋根に上がっている。上から下へ矢を放てば威力も倍増する。反対に低いところから矢を放つても、中々命中するものではないことは、戦の常識だ。それくらい、知らぬ者がないのか？

屋根の源一は次々と矢を番え、充分に引き絞つたところで放つて  
いる。放たれるたび、次々と悲鳴が上がる。

その姿を見上げ、あらためて甚助は見惚れていた。

さすがは、猿の源一！  
敵ながら、天晴れである。

## 返し矢

しかし、ここは感心している場合でもない。甚助はそろりと立ち上がり、杉木立を樋に、じりじりと移動し始めた。源二の振る舞いに疑念が生じていた。

あまりに派手すぎる。なにか、他の狙いがあるような……。

ぐさりと突き刺さった敵の矢を、源二は掴むと『』に番えた。ぐつと引き絞り、放つ。上がる悲鳴。

「返し矢だ！」

「返し矢にやられた！」

恐怖の声が上がる。

古来、返し矢は、必ず命中する、恐るべき矢であると言われている。

浮き足立つ連中の背後から甚助は叫んだ。

「火矢を放て！」

甚助の声で、男たちは救われたように火矢の用意を始めた。

屋根の源二が叫ぶ。

「甚助、やはり、お前か！」

甚助を狙つて『』を引き絞つた。

かつ！ と、甚助の隠れている杉の幹に矢が突き刺さった。一瞬、甚助が頭を下げるなかつたら殺られていたところだ。

へつ、と甚助はあざ笑つた。

もう源一の手に矢は尽きている。返し矢したのが、その証拠だ。だが、源一はまだ奥の手を持つていた。懷に手を入れる。

なにをするつもりだ？

と、源一は懷のなにかを手に一杯に掴み、ぱつと空中に投げ上げた。

## 火矢

ちやり、ちやりーん！

金属の涼しげな音色が男たちの耳に届いた瞬間、全員の動きが止まつた。

「そりゃ！ 早いもの勝ちだぞ！」

もう一度、源二は手の中のなにかを撒き散らす。

「金だ！」

一人の男が喚いた。

「金だぞ！」

わあっ、と男たちは立ち上がった。

「馬鹿、やめる！」という甚助の制止の声もあらばこそ、男たちは目の色を変え、源二が撒き散らした銭に殺到する。

足元に転がった一枚を摘んで、甚助は首を振った。銭は新鋳の永楽銭だ。この辺りでは、一枚で鏹銭数枚分の価値はある。

くそお……。やられた！

甚助は地面に放り出された火矢を掴むと、きりきりと引き絞る。

ひよお……、と火矢は空中を飛んで屋根に突き刺さる。

途端に、乾ききっていた藁屋根は、めらめらと燃え上がった。

が、源二は屋根にいなかつた。とっくに、退散していたのである。

それを見てとつた甚助は、慌てて走り出した。わざと手薄にして

いた北側が心配になってきたのだ。

燃え上がる屋根が、辺りを明るく照らし出している。  
裏手に回ると、がらりと音を立て引き戸が開かれた。中から源一

が女の手を掴んで飛び出してくる。

間に合つた！

甚助は薄く笑つた。

闇の中から現れた甚助の姿に、源一は立ち止まつた。背後の時姫を守つて、立ちはだかる。

「甚助！」

怒りをこめ、叫んだ。

「おぬし、何が狙いだ？」

「そのお姫さまだよ」

ゆつくつと甚助は近づいてくる。わざと隙だらけのようになに見せかけているが、実はその目は油断無く動いている。両手はだらりと体の両側に垂らしていた。

遠くから、わあわあと源一が撒き散らした銭を取り合つならず者の声が聞こえている。

じりつ、じりつと、二人の距離が詰まつた。

すらり、と源一は腰の刀を抜き放つた。

肉厚の刃で、反りは少なく、直刀に近い。刃は幅広で、切れ味よし、多少は打ち合つても折れない強さを求めた形だ。

甚助も自分の刀を抜いた。こちらは三尺近い長さの業物で、反りが強い。細身で、軽く扱いやすいが、相手と切り結ぶような目的では作られていない。

源一は刀の背を自分の左肩に押し当てるよつとして構えた。甚助は源一に正面に向き合い、斜に構える。

轟つ、と屋根の炎が熱風を巻き上げる。細かな火玉が、辺りに点

々と転がった。

むん！ と無言の気合を込め、源一がおおきく跳躍した。肩に担ぎ上げた刃を真っ向から振り下ろす。

さつと仰け反るような姿勢で、甚助は寸前で躊躇する。刀で受けるような馬鹿な真似は絶対しない。細身の刀は、源一の肉厚の刃を受け止めたが、一撃で砕かれてしまうからだ。

さつと源一は横に薙ぎ払った。

す、す、と甚助は軽やかに動いて紙一重に見切つて避けていた。

源二の額からは大粒の汗が噴き出していた。

へらつ、と甚助は笑つた。

「こう見えて、剣術は得意でね。今度はこちらから行くぜ！」  
無造作にすかすかと歩み寄り、腕を伸ばして突きを入れた。

うつ、と源二は一步後ろへ飛んだ。そこに甚助の第一の突きが殺到した！ 辛うじて躱した源二だったが、甚助の突きは三度あった。一瞬にして甚助は突きを三回入れていたのだ。啄木鳥の異名の由来である。

源二の目が大きく見開かれた。自分の鳩尾に、甚助の切つ先が食い込んでいる。

むおつ、と源二は大きく喚くと、手にした刀を跳ね上げた。

きいーんつ！

歯の浮くような金属音がして、甚助の刀が真ん中から真つ二つに折れていた。甚助は刀の鎬で跳ね上げたのだ。

くそつ、と甚助は毒づいた。

源二の着物の胸辺りが、大きく切り開かれている。中から鎖帷子が覗いていた。確かに突きは入つたが、鎖帷子に阻まれ、致命傷ではなかつた。

折れた刀を投げ捨てるど、甚助は一步下がつた。

源一の刀を見つめる。源一の刀は、刀というよりは、鉄の棒である。敵の刀を折ることを目的として鍛えられている。

そろそろと甚助は自分の着物の懷に手を入れた。用意の手裏剣が手に触れた。

その時、甚助は源一の様子に気が付いた。

ふーつ、ふーつと肩で息をしている。

致命傷ではなかったが、傷は深い。顔色は真っ青で、大量の汗が額から顎に伝い、ぽたぽたと垂れていた。

「歳だな、源一。諦めろ、お姫様はおれが京の都へ連れて行つてやるよ

つるさい、と源一はつぶやいた。刀を両手で捧げ持つように構える。切つ先が細かく震えている。

時姫が源一の背中にすがりつくようにしている。目が大きく見開かれ、甚助をひた、と見つめていた。

## 源一の死

ほつ……、と甚助は微かに声を上げた。なるほど、確かに美しい。

「甚助、そやつか?」

闇の中から仲間の声が響く。田の隅でちら、と数人の男たちがやつてくるのを、甚助は認めていた。

「ほう、それが時子とかいうお姫様かい? こりゃ別嬪じやねえか!」

どかどかと無遠慮に集まつてきて、男たちは值踏みするような視線を時姫にあてた。時姫は、きつと男たちの田を見返した。

「無礼者! 下がりや!」

どつと男たちの間に笑い声が上がった。

どお……、と背後の山寺が焼け落ちる。火の粉がぱつと撒き散らされ、いくつかが男たちの肌にくつついたのか、あちち……といつ声が上がった。

「おれに任せろ!」

一人が大身の槍を構え、突進した。

穂先を源一は薙ぎ払つた。

ぐわん、と槍があさつての方向を向き、突きを入れた男はその勢いに足もとを掬われるようにして倒れこむ。

わつ、と前のめりになるそいつを、源一は真っ向から切り下げるがつ、といやな音がして、男はつめき声を上げて地面に腹ばいになつた。

悶絶している。どこかの骨が折れたのだろう。

源一の驚異の手並みに、男たちの間に怯みが走った。が、それでも多数を恃み、取り囲んだ。

男たちの間に素早い目配せが交わされた。気を揃え、一斉に槍が繰り出される。

どすり、どすりと鈍い音がして、無数の槍の穂先が源一の身体に食い込んだ！

「源一！」

時姫が悲鳴を上げた。

ぐぶつ、と源一の口元から血が溢れた。

くくくく……、とそれでも地面を踏みしめていたが、やがてどりと倒れこむ。

「源一……！」

時姫の声が長々と後を引く。地面に倒れた源一に取りすがり、激しく泣いている。

甚助はふらりと近寄った。

きつと時姫が顔を上げ、甚助の顔を憎々しげに見上げる。

ふつと甚助は視線を外した。その視線が杉木立の闇に向かっている。

気になるのは、襲撃の前に聞こえた赤ん坊の泣き声であった。

闇の中を、三郎太は河童淵に急いでいた。腕には、産着にくるまれた息子の時太郎を抱いている。

時太郎は泣きもせず、父の腕に抱かれている。

時姫 。

三郎太は悲痛な瞳を、燃え上がっている山寺に向けていた。

ひしひとした囮みを見て、源一は素早く判断を下したのだ。

「三郎太、それがしは時太郎を守れ！」

え、と顔を上げた三郎太に向かつて、源一は早口に説明した。

「姫と時太郎、一人が同時に逃げることは無理じゃ！ それより、おぬしが時太郎一人を守り、逃げてくれれば、わしが姫さまを守り易い。あとで落ち合う場所を決めておけばよいではないか？ 姫、いかがでおわす？」

源二の尋ねに時姫はうなずいた。

「妾は、源二の決定に従いましょう。三郎太殿、どうか時太郎をお守りくだされ！」

それで三郎太は河童淵へ急いでいるのだ。

河童淵に辿り着けば、時太郎は安全だ。時太郎を預けて、落ち合い場所へ戻るつもりである。

闇の中を飛ぶように駆け、三郎太は一心に河童淵を目指していた。

## 産着（後書き）

『河童戦記』第一部終了です。次は『時太郎の章』を予定しています。楽しんで貰えたでしょうか？良かつたら、感想など待っています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4247m/>

---

河童戦記～時姫の章～

2010年10月26日12時50分発行